



## 不況ムードを吹き飛ばし、北海道に活気を 中標津発「もつと北海道」のCD発売

夕ぐれに 仰ぎ見る  
我が家の ともしび

日暮れて 辿るは

我が家の 細道

狭いながらも 楽しい我が家  
愛の光のさすところ

恋しい家こそ 私の青空

『私の青空』（マイ・ブルー・ヘブン）

ウォルター・ドナルソン作曲 堀

内敬三・訳詞 アメリカ曲（昭和

三年）

嬉しいねエ。今日は、この歌が  
出てくるんだから…。

私がこの年齢になるまで、楽し  
いときに知らず知らずに口から流

れる歌が、この『私の青い空』で  
ある。

太平洋戦争が始まる前の、ジャ

ズマニアが、得意になって唄って

た曲だ。私は、小学校に入った頃、

キノシタ・サーカスのジンタ（楽

団）が奏でていたのを覚えたの

だった。

今日は、この唄が出てきちゃっ

た。何カ月ぶりかなア…。

湧き水のきれいな、我が家の庭

を流れるピッコロ川（私が名づけ

た）には、クレソンがいっぱい花

をつけて、川の流れを見えなくし

ている。その側の芝生は、ゴルフ

場のグリーンのように円形で、百

ヤードほど上に建っている我が家の  
軒下から、打ち下ろしのショート  
ホールを真似て造作してある。

今日は、この芝生を大汗かいて

手押し芝刈り機で刈り上げた。な

にせ、半月ぶりの晴れた天気、暑

い一日であった。

東京から中標津へ移り住んで丸

七年だが、今年のような天候は初

めてである。さすが、北海道とい

て褒めちやいけなが、昨年なん

か（八月五日）寒くてどうしよ

もないほどだった。

「大ババ！なにか暖かいもの食べ

に行きましょよ。天ぶらご飯に

しょうかしら…」

「よしや！そうするべや。そんで

なに着てく？」

「自分で考えて、暖かぐしてらっ

しやい」

と、なって、私はこの冬に着た  
裕の着物に股引き、そして黒足袋  
という出で立ち。

「アラア…。まるで冬ねエ」

「仕方ないべや。寒いんだモン」

「そうね。じゃ、行きましょ」

で、あったのだ。

その前日も、ずーつと、そうだっ

たが、今日はこの天気。

「おーっ、北海道にも夏があった

かア」と、思う感じのいい天気で、

自然にこの唄が出たのであった。

天候が不順。世の中の景気が不

順。先月閉会した政界が不順。ま

たくいいとこなしの連続であった。

だけど、雨のあとは晴れて、必ず

明るい陽が昇るのである。きつと

いいときがくるさ。

元気を出していこう！

そして、ついにできたよ。『もつ

と、北海道』のCDが。東京で

作ったんじゃない。ぜんぶ中標津

産なんだもん。スゴイじゃないさ。

録音も（札幌）中味（作詞・作曲・

唄）もジャケット（雨宮印刷）も

だからね。この新根室の七月号と

八月号に書いたほど、私が気を入

れた作品なんです。ぜったい楽し

くて元気になる歌なんだから…

（自分でいってんだから間違いな



『もっと北海道』のCDジャケット

いわざ)。このピアノフォルテを  
読んだ皆さん、必ず覚えて唄って

ください（九月中旬発売予定）。  
このジャケットの「ふうちゃん

（新根室六月号ピアノフォルテ挿  
入「ゆるりら森のなかまたち」の、  
たかたのりこ画） みたいに子ども  
たちが、楽しくて声を上げると  
大人はみんな嬉しくなって元気に  
なるんだよね。

八月は日本全国、この釧根地区  
の市町村でも、お祭りのラッシュ  
だ。

お祭りは楽しい。子どもも大人  
も一緒になって盛り上がる。

私は毎年標津町民祭り、水キラ  
リの音楽プロデューサーを仰せ  
つかって、人一倍、盛り上げられ  
てもらった。なにせ、我が作詞・  
作曲した『キラリ音頭』を標津町  
の大人も子どもも、本祭りの夜に  
は総踊りをしてくれてる。私も、  
小田桐町長と並んで提灯を掲げ、  
役場の前からサーモンパーク広場  
までの約四キロほどを五台のデツカ  
イ山車の前を歩いたのである。こ  
の日だけは、体の中が幸福とい  
うかたまりがいっぱい感動の涙と  
一緒に満ち溢れている。ことに『ゆ  
めの山車』を引く二百人もの子ど  
もたちが「標津音頭でエーみんな  
きーて踊れエー」と踊りながら、  
メイン会場に入ってきたときは  
「ウーツ」と声を出して泣いたほ

どの感動であった。

あんまり幸せ過ぎて、誰に感謝  
のお礼をいえないのか。

人間、誰もがこんな気持ちにな  
るかどうかは知らないが、私たち  
老夫婦は、当幌という土地に住ん  
で、緑いっぱい大地に、小鳥た  
ちやキタキツネ、エゾリスなどの  
動物たちとなん気兼ねもなく  
（ちよつと大げさ）暮らしている  
と、いつのまにか、彼らと変わら  
ない性格（これもオーバー）になっ  
てるようだ。東京生まれで東京育  
ちの家内は、この四、五年で、すっ  
かり変わったような気がする。都  
会のコンクリートしかない土地か  
ら、草と土ばかりの上で七年も暮  
らせば、さもあらんと思つのだ  
が、ゴミを焼きに出で、近寄つて  
くるカラスと話をしたり、草むし  
りをしながら誰かと話してるの  
かと思つたら「アラツ、ゴメンネ」  
と抜き取ってしまった野花に謝っ  
てんだから、少し気が違つてきた  
んでないかと思うふしもあるくら  
いだ。先日、外食をしたときのこ  
とだ。  
「すみません！ なにか、この残つ  
たお肉を入れる袋がタッパー、な  
いかしら…」

「ハイハイ。ドウゾ」

と、タツパーを持ってきてくれた。ずいぶんと儉約家になったもんだ。家へ帰っても犬も猫もいないんだから、俺の晩飯のおかずにでもするのかと思つて、聞いてみた。

「俺の晩飯のおカズに、またこの残りもんかア？」

「違いますウ。うちのカラスのお土産なのツ」

「おまえ！おかしんでないかい？どこに、カラスにお土産、持つて帰るやつ、いるか？」

「だって、可愛いんだもん。あのカラスだって、黒くなかつたら、みんなに可愛がられるのよ。いじめちゃかわいそうだから」と、きたもんだ。

私はフライドチキン（ことにケンタッキー）が大好きだ。隣の阿部チャンの奥さんが釧路へ行ったときのお土産に買ってきてくれ、その食べかすの骨を窓の外のカラスに投げ与えようとしたときである。

「あなた！だめよツ。カラスの喉にひっつかつちゃ大変でしょ！捨てちゃだめ」

「バカモン！犬や猫だって鳥の骨

は大丈夫だア。カラスなんか、骨食わんでどつするウ？」

やつぱり、ちよつとおかしくなつてゐる。優しいのはいいけど、緑ボケかなア…。俺にはあんなに敵しいのになイ…。

テレビはめつたに見ないのに、ベッドに横になり、ニュースでもとスイツチを入れた。ドラマをやつてゐる。なつかしい女優が、お母さん役で出演していた。そのお母さんの顔がグーンと若い少女になつて、昭和三十五年の頃にタイムスリップ。私が東京の文化放送という局で、連続ラジオドラマの音楽を担当しているときを思い出した。その少女は、いしだあゆみといつた。彼女は、私のやつてゐる『有チャンのハイ、起きてます』という、有島一郎が主役のドラマとは関係のない、Mさんが主役のドラマの娘役で出演していた。当時は放送する日の数日前に録音するため、テレビの放映より、ラジオの全盛時代だった。ラジオ局のスタジオはどこも満パイ。私が音楽を担当している第五スタジオの隣の第三スタジオで、Mさんと一緒に出演していた。私が録音が終わつてバンドの連中と一緒に

エレベーターに乗ろうとしたとき、私の担当ディレクターもやつていた隅田君（のちに文化放送の専務）がエレベーターから降りてきた。

「やあや、まいつたよ。あゆみが泣いちゃつて録音ならんわ！」

「隅ちゃん！どしたのさア…」

私が聞いてみると、

「エレベーターの中で、Mさんがあゆみにキスしたらしいんだわ」

「キスくらいになよ。もう、赤ん坊じゃあるまいしイ…」

「それがさア。いつもなら、ホツペにチュウだつただけけど、唇にされたア。つて泣いてんのよ。」

まいつたなア…」

「そりや、Mさんも悪いわア。まだ子どもだもなア。ビックリしたんだべなア…」

みんなで、大笑いしたときのこと、つい昨日のことのようだ。あれから、四十年。五十歳を過ぎた少女が、お母さんになつてゐた。

時の流れの早いには、今さらのように驚いてしまふ。夜中のテレビドラマ『命、捧げ候』という

金曜時代劇で十六年もの長い間、渡り歩いた男の話だったが、小説や物語にすれば五年、十年という時間は、すごく長いときとなつて

いる。十六年なんだから、ものすごく長い年月のドラマである。しかし、現実はいつて長いもんではない。自分の身の回りの現実が、時間を刻んでどんどん進んでいつてると、一年も二年もたいして違つてゐない。だから、十年過ぎようが二十年過ぎようが、振り返つて数えない限り、ちつとも長い年月ではない気がする。なにせ、昨日の少女が今、五十過ぎのお母さんなんだもなア…。

身の回りの現実が、どこでなにをやつても、私にはなんの関係もなく時間が過ぎていく。さア、今日から明日へ向かつて、楽しく生きていくよウ。もつと、北海道を唄つて、もつともつと元気になるよウがんばりましょウ。